日本語名詞句の意味機能と談話理解モデル

吉田悦子
三重大学人文学部

0. はじめに

日本語の自然発話において名詞句が連続して生起するパターンは普通に観察される現象である。こうした名詞句の連鎖はいったん代名詞（ゼロ代名詞）化されても再び名詞句が出現して談話の話題として定着するという特徴があり、従来の連辞的な照応関係の法則からは予測することができない。本稿ではこうした日本語名詞句に焦点をあてて､｢センタリング｣｢キャッシュ｣｢プッシュ｣｢リターンポップ｣と呼ばれる計算言語学の談話理解モデルにおける概念によって、その意味機能を談話構造の階層性と結びつけて説明することを試みる。そして、名詞句の機能を背景で支える発話状況と談話記憶に目を向けて、自然発話において話題の継続性を担う指示表現はゼロ代名詞よりはむしろ名詞句が中心であり、その連鎖が談話の整合性と有機的に結びついていることを指摘する。

1. 日英語の指示表現と談話に関する先行研究

指示表現と談話構造の関係に注目した研究は、近年着実に発展してきている。とりわけ、談話における指示表現の分布と選択に関する研究(Prince 1981, Gundel et al. 1993)や、指示を情報構造、話題の継続性からとらえようとした研究（Givón 1983; Chafe 1987）が後続の研究に与えた影響は大きいが、日英語の指示表現の形式的な差が意味的にはどのように対応するのかについて、その動機付けや体系的な説明は未だ十分解明されているとはいえない。

このような流れの中で名詞句が談話において果たす役割に焦点を当てた日本語の重要な研究に目を向けたい。坂原（2000）は、談話における日英語の名詞句の振る舞いには共通した現象が認められることを指摘し、日本語の裸名詞と英語の定冠詞句、また日英語の指示形容詞句とをそれぞれ比較して認知意味論の視点からその意味機能における類似性を主張している。Obana (2003)では､日本語の談話において、話題の継続性に貢献しているのはゼロ代名詞ではなく名詞句であることに注目し、従来の指示をめぐる見解への見直しを議論している。このうち、Obana (2003)における主張は興味深く、ゼロ代名詞と名詞句、3 人称代名詞が談話の異なる局面において選択される事実を指摘し、詳細な談話の観察をもとにその動機付けを探っている。本稿ではこの Obana (2003)における主張である名詞句と話題の継続性という点に焦点を当てて、自然な発話を収集した対話的談話においてもこの考察が指示の一般的現象として果たしてあてはまるものかどうかについて検討を加えたい。

2. センタリングモデルを利用した分析の方法

センタリングモデルは、照応と談話構造とのかかわりに注目した計算言語学の認知モデルのひとつである。センタリング(‘centering’)とは話題の中心になる要素（センター ‘center’）と談話における局所的なつながり（談話単位内）を問題にする。センタリングモデルの概要については石崎・伝（2001）および田窪他（1999）を参照。本稿で利用するのは Cf のランキングであるが、談話における局所的なつながりを調べるためには Cb と呼ばれる要素が重要である。Cb は Givón(1983)の定義する「トピック」に相当し、現発話における注意の焦点にあたるものであり、また話し手と聞き手の双方が共有する局所的な話題として現発話において最も顕著な(salient)要素である(Brennan 1995)。そして発話内のすべての要素である Cf のうち､現在の発話の中心となる Cb と次の発話の中心になると予測される Cp との関係が談話の局所的な結束性を判断する重要な決め手となる。つまり、各発話の中には、複数の Cf の出現が予測され、その中に一つの Cb が存在すると考えられる。さてこの複数の Cf のうちどれが一番発話の中心である Cb になるのかを予測するための尺度が Cf ランキングと呼ばれるスケールである。

日本語に関しては、主題や視点表現など談話的かつ認知的観点を優先させた序列が提案されている。Gundel et al(1993) の認知スケールでも対応していたように、英語の無強勢の代名詞は日本語のゼロ代名詞に相当するとみなされ、この規則はそのまま日本語のゼロ代名詞として実現される場合に拡張可能であるという。

(1) (ゼロ)主題＞視点＞ガ格＞二格＞ヲ格＞その他
(Walker, Iida and Cote, 1994)

この序列は、Cf 内でランキングが高い要素ほど現在の発話の中心になりやすい傾向があることを示している。つまり、英語では最上位にある主語が中心になりやすく、日本語ではゼロ主題が中心になりやすいということになる。本稿では、日本語の照応表現のタイプのうち、裸名詞句、指示形容詞句、指示代名詞、ゼロ代名詞に注目して、この Cf ランキングとどのように結びついているかについて調べてみることにする。さらに、このセンタリングモデルをより現実の発話に即して、指示の局所的なつながりだけではなく大局的なつながりも取り入れる試みとして、近年 Walker(1998, 2000)においてキャッシュモデルとよばれる統合型の談話モデルが新たに提唱されている。ここでは、センタリングという概念に加えて、このキャッシュモデルで利用されている概念のうち、キャッシュ(‘cache’「短期談話記憶」)とプッシュ(‘push’「割り込み」)、リターンポップ(’return pop’「復帰ポップ」)の３つを導入して、説明する。

3. 分析の結果

日本語のデータは、収録の条件や環境をほぼ同一にして作成された「日本語名称なし地図課題対話コーパス」8 対話分である。この全体のデータの中から本稿で考察の対象としたのは、日本語のデータ 1 対話分のみである。日本語データの概要については、吉田(2002)を参照。

日本語の照応表現のうち、裸名詞句、指示形容詞句、指示代名詞、ゼロ代名詞の出現頻度と Cf ランキングとの関係は以下のようになる。

表１

形式 / Cf	裸名詞	指示形容詞句「ソノ N」	指示代名詞「ソレ」「ソコ」	ゼロ代名詞	計
Topic「ハ」	19(52.8)	1(2.8)	3(8.3)	13 (36.1)	36(100.0)
Subject「ガ」	22(70.9)	3(9.7)	2(6.5)	4(12.9)	31(100.0)
Object「ヲ」	5(62.5)	3(37.5)	0(0.0)	0(0.0)	8(100.0)
Others	35(74.5)	7(14.9)	5(10.6)	0(0.0)	47(100.0)
計	81(66.4)	14 (11.5)	10(8.2)	17 (13.9)	122 (100.0)

裸名詞句は全体の指示表現のうちほぼ 66.4%を占めており、すべての Cf ランキングにおいて最も出現頻度が高い。ゼロ代名詞は全体の 13.9%に過ぎないが、すべて主題か主語の位置で用いられている。指示形容詞句、指示代名詞については「ソ」系が中心であり、「ソノ N」は複数の Cf で出現していることがわかる。以下、ゼロ代名詞、裸名詞、指示形容詞句の順にそれぞれ考察する。

4. 考察

4.1 ゼロ代名詞

ゼロ代名詞は話題の中心として定着した談話の要素としてみなされている。対話コーパスにおける出現頻度は予想外に少なく、かつ話題として継続しないまま中断しやすい傾向がある。

(2)

G:で

G:こんどは

G:そのもみのきの<220>まみなまみなみとはいかないんですけど

G:したに<360>こうどしゃくずれみたいな<260>えがありますか

F: [ø] がけみたいなんがあってどしゃくずれっ({てことで*すか[?]})

G: *あ<390>あわたしのえにはそのがけのえがないんですね

F:({はい[?]})+

G:+ん

G:*た

F:* [ø]どうくつとはちがういますよね

G:はい[ø]どうくつとはちょっとちがいま*す

ゼロ代名詞はコピュラ文のゼロ主題の位置において目標物の位置や状況を確定しようとする表現（「[ø（それは）]がけみたいなんがあってどしゃくずれっ({てことで*すか[?]})」）が後続する場合、あるいは他の競合する対象と比較する場合「[ø（それは）]どうくつとはちがういますよね」や「[ø（それは）]どうくつとはちょっとちがいます」におけるように、「A は B である」のかどうかを確認する表現が後続する場合に用いられている。ゼロ代名詞の用例の大半は目標物の有無について述べる存在文においてゼロ主題として用いられている。話し手と聞き手の間での短いやりとりの発話（とくに答える側）に限られている：「[ø（こやは）]ないです」;「[ø（どうくつのやまは）]がれきのましたにあります」;「はい[ø（たきは）]きたにあります」ここでは話し手と聞き手が所有する対象は共有されておらず、それぞれが自分の所有するひとつの指示対象に言及しているという

特徴がある。ゼロ代名詞・ゼロ主題は話題の確立を示す最上位のランキングでありながら、こうした要素は両者によって共有されている情報ではないので、談話における話題の共有は一時的なものにすぎない。Obana(2003) ではゼロ代名詞の連鎖はいわゆる ‘topic chain’ (Givón 1983) とは異なるものであり、談話における動的なコンテクストの変化によって容易に中断されやすいものであることを指摘している。また、人間を主語にしている談話データにおいてはゼロ代名詞の連鎖は連続して起こる動作や出来事の進行において特徴的に用いられるという。ただし、その場合競合する要素が当面のコンテクストにおいて存在しないことが多い。

4.2 名詞句

通常、名詞句は継続して用いられる傾向がある。まず、新要素の導入として主語標示「ガ」を伴って名詞句が導入された後、そのまま繰り返し用いられる。

（3）

F:たきがありますよね
G:あまきたに
G:たき*
F: *たきさいしょとおってきた
G: [ø（たきは）]なないですね
F:たきじゃ
F:*いまいるそのなん<320>みな*みにさんせんちさがったと*ころの
G:*たき
G: *うん
G:
*うんうん

どの「たき」のことかを同定するために、途中で一度ゼロ主題のゼロ代名詞が生じていることを除けば、名詞句が繰り返し話題の中心として用いられている。結局、目標物は両者の間では同定されないのであるが、共有していることを想定しながら継続して用いられている。この談話は、さらに他の要素の導入による割り込みがしばらく続いたあと、再びこの「たき」にもどり、今度は主題標示「ハ」を伴い、話題として定着している。談話単位１で再導入された名詞句「たき」は、後続の２つの談話単位（２と３）の割り込みをはさんで、談話単位４（復帰ポップ）の最初の発話で復帰する(2,3,4 の談話単位の例は省略)。

(4)

Seg.	U	Sp
1	(1)	F:+えその<350>*えと<330>みなみにさがったてん<370>*をまっすぐきたにせんのばしていくとたきは
	(2)	G: *はは G:
	(1)	*うん F:ひがしにありますかにしにありますか

主題標示「ハ」で再導入された要素は、同定表現により継続して用いられ、話題として確立していく過程がみられる。名詞句の継続的使用は ‘topic chain’ を形成するという Obana(2003)の主張は、対話データにも重なる現象である。しかも割り込みの談話単位によって一時的に中断されても話題の中心は復帰ポップまで引き継がれている。

4.3「ソノ」形容詞句

データから判断する限りでは 2 つのタイプがある。ひとつは、「ソノ名詞句」が直前に談話に導入された対象を即時に指示する場合である。

(5)

G:したに<360>こうどしゃくずれみたいな<260>えがありますか
F: [ø] がけみたいなんがあってどしゃくずれっ({てことで*すか[?]})
G: *あ<390>あわたしのえにはそのがけのえがないんですね

談話の話題は「どしゃくずれ」としてすでに導入されており、「がけ」は競合する要素としての「どしゃくずれ」と対比的に出現しており、相手の所有する要素を直接指示するために「ソノ形容詞句」が選ばれている。指示形容詞句により言及される要素には本来継続している話題の中心からはずれるものであるという含みがあることと関連があるのかもしれない。もうひとつのタイプは、最初の談話単位の直後に新しい要素として導入された名詞句が次に導入される名詞句の参照点として機能している場合である。

(6)

Seg.	U	Sp
4	(11)	G:で G:こんどは G:そのもみのきの<220>まみなまみなみとはいかないんですけど
	(12)	G:したに<360>こうどしゃくずれみたいな<260>えがありますか

割り込みの談話単位３の直後（例は省略)、復帰ポップの談話単位４の最初の発話において「ソノ形容詞句」は出現している。「もみのき」はすでに割り込み前の談話単位１（例は省略）において話題として導入されているが、復帰ポップ４においては、新しい要素を導入するための参照点として機能している。いったん割り込み３によって中断されても、短期記憶に保存されている情報はすぐに呼び出し可能である。坂原（2000）は指示形容詞句には焦点化の機能があり、「指示対象にある種の近接性を与え、同定される対象に特別の注意を向けさせるズームアップのような効果」があることを指摘している（227)。この焦点化は、話し手聞き手の双方にとって直接アクセス可能な指示トリガーとして働き、「そのもみのき」を手がかりにして、「どしゃくずれみたいなえ」へと導く。このように割り込みによっていったんそらされた注意を再び向けさせる働きをもつ指示形容詞「ソノ」は要素を同定するだけではなく、話の流れを変化させる役割がある。このような働きができるのは指示形容詞句の探索領域が狭く、指示対象が複数あっても固定化した対象を探索できるためだと坂原（2000：240）は指摘している。

5. おわりに

本稿では、日本語の照応表現のタイプとして、裸名詞句、指示形容詞句、指示代名詞、ゼロ代名詞をとりあげ、話題の中心を担う日本語名詞句の意味機能について検討した。センタリングモデルの Cf ランキングで話題の中心になる可能性を探るとともに、談話単位内だけにとどまらず、談話単位を越えて話題が継続する現象について考察を加え、その要因についてもふれた。

本稿で利用した日本語データは１対話のみであり、複数のデータによる分析を経なければ十分な結果として評価することはできないが、少なくとも今回得られた結果は興味深いものである。日本語においては、ゼロ代名詞よりはむしろ、名詞句（裸名詞）こそが談話の整合性と有機的に結びついていることはまちがいない。つまり、継続して使用され、話題の中心を直接担うのは名詞句であり、談話単位を越えても話題は引き継がれる。ゼロ代名詞は極めて限られた場面での話題の共有しか許さず、しかも中断しやすく、談話単位内でしか生起しない。ソ系の指示詞は話題の継続を間接的に支えているような面があり、裸名詞を補完するような形で談話の整合性と深くかかわる言語要素として機能しており、さらに検討する必要がある。したがって、こうした結果により、これまで漠然と理解されていたような名詞句の出現パターンは、従来の照応の解釈によっては十分に予測できないものであり、談話理解のためのモデルを利用して認知的な解釈を加えていくことが有効である。

参考文献

Brennan, S. E. (1998) ‘Centering as a Psychological Resource for Achieving Joint Reference in Spontaneous Discourse’. In M. A. Walker, A. K. Joshi & E. F. Prince (eds.), *Centering Theory in Discourse*. Oxford: Clarendon Press. 227-249.

Chafe, W (1987). ‘Cognitive Constraints on Information Flow’. In R.S.Tomlin (ed.), *Coherence and Grounding in Discourse*, Amsterdam: Benjamins. 21-51.

Givon, T. (1983). ‘Topic continuity in discourse: An introduction’, in Givon and Ute Language Program, T. (ed) *Topic Continuity in Discouse: A Quantitative Cross-Language Study*. London: John Benjamins. 1-41.

Gundel, J. K., N. Hedberg and R. Zacharski (1993) “Cognitive status and the form of referring expressions in discourse.” *Language*, 69, 2: 274-307.

堀内靖雄,中野有紀子,小磯花絵,石崎雅人,鈴木浩之,岡田美智男,仲真紀子,土屋俊,市川熹(1993)「日本語地図課題対話コーパスの設計と特徴」『人工知能学会誌』Vol.14, No.2, 63-73.

石崎雅人・伝康晴(2001)『談話と対話』東京：東京大学出版会

Obana, Yasuko (2003) “Anaphoric choices in Japanese fictional novels: The discourse arrangement of noun phrases, zero and third person pronouns” *Text* 23(3): 405-443.

Prince, E. (1981) ‘Toward a taxonomy of given-new information’ In P. Cole (ed.), *Radical Pragmatics*. New York: Academic Press. 223-56.

坂原茂　(2000)「英語と日本語の名詞句限定表現の対応関係」『認知言語学の発展』東京：ひつじ書房　213-249.

田窪行則, 西山佑司, 三藤博, 亀山恵, 片桐恭弘　(1999)『談話と文脈』（とくに３章を参照）東京：岩波書店

Walker, M., M. Iida and S. Cote (1994) “Japanese Discourse and the Process of Centering.” *Computational linguistics* 20: 193-231.

Walker M. A., A. K. Joshi and E. Prince (eds.) (1998) *Centering Theory in Discourse*. Oxford: Clarendon Press.

Walker, M. A. (1998) “Centering, Anaphora Resolution, and Discourse Structure.”　In Walker M. A., A. K. Joshi and E. Prince (eds.). 401-436.

Walker, M.A. (2000) ‘Toward a Model of the Interaction of Centering with Global Discourse Structure’ Verbum.

吉田悦子(2002)「日本語名称なし地図課題対話コーパスの概要と転記テキストの作成：報告」『人文論叢』第 19 号. 241-249.